図書館情報学橘会会報 第25号(通号31号)

2019年3月発行 発行者 図書館情報学橘会

人が情報をつなぐ、情報が人をつなぐ

泉澤 久美子 (図書館短期大学文献情報学科 1975 年卒業)

2001年頃だったか、私の職場で図書館システムの 更新があったが、作業に来てくれた女性二人の名刺 には SE のほかに「司書」と書かれていた。何とな く親しみを感じて尋ねてみると、やはり図書館情報 大の卒業生であった。一人は「図書館」ではなく「情報」にもっぱら興味があり SE 目指すことにし、も う一人は図書館で働きたかったが、司書のステータ スがあまりに低いことにがっかりし SE に方向転換 したのだという。実は、私が図書館短大文献情報学 科を受験したのは、「司書」というよりも当時として は聞き慣れない「文献情報」という言葉に魅かれた からであった。1973年のことである。

さて、私は卒業後、開発途上地域の経済・政治・ 社会等に関する研究を行うアジア経済研究所(以下、 アジ研と略、現在は日本貿易振興機構の付置研究所) の図書資料職として採用され、その後 40 年間奉職 することとなった。入所当初、図書館職員約30名 の中に図書館職員養成所と図書館短大出身の頼もし い先輩が、7人もいらっしゃって大変心強かったの を覚えている。アジ研図書館は途上国の現地資料を 含め、関連研究資料の収集・提供を行う専門図書館 であるため、いわゆるエリアライブラリアンとして 各自の担当地域に精通することが求められていた。 私も中東担当者に成るべく、まずアラビア語研修を 皮切りに研究会の末席に加えてもらい、最初の数年 は仕事よりも勉強の方が大変だった気がする。その 後、現地資料の調査・収集、文献目録・解題の作成 にあたるなど、中東にどっぷり浸かっていたように 思う。

しかしながら、1990 年代後半以降の急速な IT 化 に伴い、アジ研図書館でも大きな転機を迎えること になった。その契機となったのが図書館統合システ ムの導入である。特に、NACSIS-CAT 加盟によって目録の標準化が実現し、相互貸借など大学図書館との連携が広がった一方、他大学にない多数の蔵書が可視化できたことでアジ研図書館の面目躍如ともなったのである。その後、ウェブサイトによるOPACサービスや情報発信、電子ジャーナルの導入、電子図書館の構築と怒涛の如くIT化が進んだ。

アジ研のように類似分野の専門図書館が少ない場 合、情報交換の場があまりなく、こちらから積極的 に情報を取りにいかないと孤立しがちである。IT化 に取り組んだ際、私が最も頼りにしたのが図書館情 報大の先生方や同窓生たちとのつながりであった。 とりわけ石井啓豊先生には、学生時代に同じコンピ ュータ室に出入りしていたご縁を頼りに、貴重な助 言を頂いたり、電子図書館の構築のために宇陀則彦 先生を紹介して頂いたりと大変お世話になった。ま た当時、アジ研にとって未知の媒体だった電子ジャ ーナルを導入できたのは、業者の紹介からシステム のノウハウまで親切にご教えてくれた後輩同窓生に 依るところが大きい。ほかにも私の場合、なにか困 ったときや情報を得たいときには先生や同窓生の顔 を思い浮かべ、図々しくもずいぶんこのネットワー クを活用させて頂いた。今でも感謝に堪えない。

私の退職後のことだが、アジ研内では「図書館は IT に強い。情報発信力が高い。」と評価され、学術 情報の発信を含めた研究所全体のウェブサイトの運 営を担っているという。これには別な思惑もあろう が、ポジティブにとらえたい。

昨今、図書館は従来のような文献提供の場として の役割が減少しているようにみえるが、ウェブ上の 膨大な情報空間をも図書館と考えれば、ライブラリ アンの果たす役割はますます広がるのではないか。

◇ 永年のご薫陶ありがとうございました ◇

平成 31 年 3 月をもって杉本重雄先生がご定年となります。有難うございました。先生にはメッセージ をご寄稿いただきました。

杉本 重雄 教授 【専門】ディジタルライブラリ、ディジタルアーカイブ、メタデータ

学んだこと、思ったこと、伝えたいこと

筑波大学図書館情報メディア系教授 杉本 重雄

私は 1983 年 10 月に図書館情報大学に助手として着任し、途中で筑波大学と変わりはしましたが、ずっと同じキャンパスで過ごしました。着任時にはつくばセンターのあたりもまだ作りたてで 1985 年の科学博に合わせた工事があちこちで進んでいました。東京に出るのに常磐線頼りだった時代から、高速バスの時代、そしてつくばエクスプレスの時代とずいぶん環境は変化しました。長い時間がたったなぁと感じる一方、昨日のように覚えていることも多くあります。ここでは、記憶をたどりながら自分自身の素朴な思いを書いてみたいと思います。

着任してすぐ大きなカルチャーショックを受けました。最初に驚いたことは女子学生の多さでした。私は工学部の情報工学科で 10 年を過ごしました。当時の情報工学科は、ほぼ全員男子学生でしたので、雰囲気の違いに戸惑いました。そして、図書館に関する知識もほとんどなく、情報という語が名前に入っているから自分は場違いではないのだろうくらいの理解しかもっていませんでした。そのため、図書館とは、図書館情報学とは、といった議論にはついていけずにおりました。そうした中で、桜井宣隆先生から、Documentationが Information Scienceへとつながっていく話や、図書館短期大学での文献情報学科の設立時の話をうかがったことが強く印象に残っています。

90 年代に入り、当時助手の阪口哲男さん、藤田 岳久さん、大学院生の永森光晴さんから、インター ネット上でのいろいろな新しいサービスのことを 教えてもらいました。同じ頃、ディジタルライブラ

リということばと出会い、これは何か面白いことができるチャンスだなと素朴に感じました。これらは、いずれもインターネットが爆発的に広がる直前のことでした。そして、田畑孝一先生をリーダーに図書館情報大学で開催した国際シンポジウムやディジタル図書館ワークショップがその後の研究活動の方向性を決定づけました。私自身はディジタルライブラリを通じて海外の人たちと密につながる活動を進めるようになり、そうしたつながりの中でメタデータということばと出会いました。最初はメタデータって何だろうという状態だったのが、いつの間にかメタデータが研究の中心になっていきました。

こうした活動と並行して、ピッツバーグ大学をは じめとしていくつかの Library School も訪問しま した。90年代の中ごろに、ミシガン大学のSchool of Information and Library Studies を訪れた際に、 Gary Olson 先生から School の名前を School of Information とすることにしたとうかがい、 「Science も Studies もなく Information だけ」、 「School of Law と同じように School of Information なんだ」と、強い印象を受けたことを よく覚えています。その後、北米での Library School から Information School へのシフト、そし て iSchool の活動への発展を間近に見ることがで きました。そして、こうした変化をタイや台湾他、 東・東南アジアの図書館情報学関係の方々と共有す る活動ができたことは、とても幸運であったと思い ます。振り返って考えると、桜井先生に教えていた

だいた Library School での Information Science の潮流が、インターネットの爆発的拡大による社会環境の変化で Information School、そして iSchool の潮流につながり、さらにデータ資源や利用者の視点に基盤を置く Data Science へとつながってきているなと感じます。

筑波大学との統合の前、森茜さん(橘会名誉会長) が図書館情報大学の事務局長をされていた際に、動 向調査のためにアメリカのミシガン大学や NSF 他 にご一緒したことがあります。最終訪問地はハワイ でした。ハワイでは、標高 4000 メートルを超える マウナケア山頂にある国立天文台のすばる望遠鏡 を見学しました。その場所に行ったこと自体が貴重 な経験として記憶に残っていますが、それ以上に、 「海岸近くにある研究施設でデータをとれるので、 山頂まで行く必要は基本的にはないのです」と聞い たことが強く印象に残っています。現代の望遠鏡が 観測データをディジタルデータとして記録するの は当たり前のこととはいえ、それを考えたこともな かったので「目からうろこ」でした。その時、観測 で取得した研究用データの共有の話もうかがった と思います。研究データは、現在の大学図書館にと っては重要な話題ですが、当時は、そこで聞いたお 話が e-Science、そして研究データの共有とオープ ン化といった潮流につながっていくことへの想像 力を持っていませんでした。

このように、海外とのつながりの中で活動を続けてきましたが、その中で、多くの留学生とのかかわりを持つこともできました。1989年に在外研究の機会をいただき、カリフォルニア大学サンタバーバラ校での10か月間の滞在から帰国後、今度は受け入れる番かなと思ったことがきっかけです。私が大学院生であった40年前には、今のように多くの留学生はいなかったですし、また、国際会議で発表する機会も今ほどはありませんでした。そのころは、海外とのつながりは何か特別なことであったと思えます。ところが、現在では、海外とのつながりのないところを探すことのほうが難しいように思えます。図書館においても、図書館の利用者、図書館が扱う資料、図書館間のつながり、どれをとっても

海外とのつながりが普通になってしまったのではないでしょうか。普通になるというのは、海外や国際化といったことばを使う必要がなくなることを意味しているのかもしれません。

図書館情報大学から筑波大学に変わりはしまし たが、同じキャンパスで35年余りお世話になりま した。最近は、自分にできることは、人と人をつな ぐことくらいかなぁと思うようになりました。その 背景には二つの活動があります。一つは、総務省の 支援を受け、永森さんやインフォコムさん他の協力 で 2012 年以来続けてきた「デジタルアーカイブネ ットワーク(DAN)」の活動です。この活動では、 地域のディジタルアーカイブ作りのための意見交 換の場としてのワークショップを開いてきました。 この活動からは、小規模な地域の図書館や博物館が 持つディジタルアーカイブに対するニーズやシー ズは、それぞれの組織だけでは解決も利用も難しい かもしれないけれど、組織間で人と人がつながれば いろいろなことができそう、ということを強く感じ ました。すなわち、地域のディジタルアーカイブ作 りは、人のネットワーク作りからというものです。 もう一つは、東・東南アジア地域の図書館情報学関 係の大学の人たちとのネットワーク作りです。これ は、国際会議等で知り合った人たちと、「自分たち は互いのことよりも地理的には遠い欧米のことの 方をよく知っているようだから、自分たちのネット ワークが必要だね」と意見が一致し、10年余り前 から続けてきたものです。まだまだ発展途上ですが、 協働の下地となるネットワークはできてきたと思 います。

研究活動を長く続けてきて自然と多くの方々と つながりを持つことができました。そうしたつなが りが、これからの人たちのつながり作りに、ほんの 少しでもお役に立てば、とても幸せに思います。



2018 年度 最終講義 西岡貞一先生 日時: 2019 年 1 月 28 日(月) 13 時 30 分-15 時 会場:メディアホール 演題:「創ってわかる、使ってわかる ―つくばでのメディア教育―」 杉本重雄先生 日時: 2019 年 2 月 22 日(金) 15 時 - 16 時 30 分 会場:ユニオン 1F 講義室 演題:「素朴に思うこと」 緑川信之先生 日時: 2019年3月22日(金)15時15分-16時30分 会場: 7A205 演題:「Himagine the Future(もうすぐ暇人)」

活躍する会員

第20回図書館総合展のポスターセッションに出展しました!

片山ふみ (聖徳大学)

はじめに

私が勤務しております聖徳大学文学部には、図書館情報コースが設置されており、1 学年 15 名~25 名前後の学生が在籍し、図書館情報学を専門に学んでおります。私は、2014年度に本学に着任した後、翌年からコースの3年生を図書館総合展に引率する試みを始めました。そして、2017年からは3年のゼミ生とともにポスターセッションに出展しています。

本稿では、第 20 回図書館総合展におけるポスターセッション出展についって報告いたしますが、その前に、なぜ、ポスターセッション出展を始めたのかを説明させていただきたいと思います。

図書館総合展の引率を始めた 2015 年当初、設定していた学生の参加目的は、以下の 2 点です。

- ① 最新の情報技術や注目のサービスに触れ、知識を深める
- ② 図書館関連業界の広さを体感し、就職活動に 活かす

3年生という学年設定からどちらかといえば、②に重きがあり、キャリア支援の一環に位置づけていたように記憶しています。当日は「学生のための展示ブースツアー」への参加は必須とし、後は自由行動としました。参加後の学生の反応から、いずれの目的もある程度達成できたと思います。しかし、予想外の声もありました。目的②の意味での職種の幅広さは理解しつつも、学生から「業界せますぎー!」という声がちらほら聞こえたのです。その理由を聞くと、「先生がすぐ誰かにつかまるから」というものでした。そして同僚の先生からは「片山先生のホームだからね」といわれたのです。

確かに図書館総合展は、図書館情報大学や筑波大学の図書館情報専攻卒業生であれば、10分歩けば、知人(後輩、同期、先輩、恩師)に出くわすという、 半ば同窓会の様相を呈した催しとなっております。 そして、久々にあった知人が、新しい誰かを紹介してくれ、新たな知人ができるというつながりがつながりを呼ぶ素晴らしい空間でもあります。私はそのつながりの中にいることに、学生や同僚の先生の発言によって気づかされました。ただ、広い意味で図書館にかかわる者のつながりを捉えれば、この中に学生自身もいるわけです。そのことに気づいてもらうことは、図書館情報学徒としてのアイデンティティ形成や、ライブラリアンシップの身体化につながるのではないかと思うに至りました。

そこで、2017 年以降、私の中で 3 つ目の目的が 加わりました。

③ 図書館の現場の方々、学術業界の方々などと コミュニケーションをとり、学生自身が図書 館業界のメンバーである意識を高める

来場者として参加するという受け身の姿勢ではこれを達成することは難しいと判断し、「出展者として参加する」方法をとることにしました。もちろん、 出展者となることによって学生のアカデミックリテラシー育成に有用だろうという確信もありました。

以上がポスターセッション出展の経緯となります。

ポスターセッション出展の概要

コース全体を対象とした図書館総合展への引率は 続けながら、ポスター出展はゼミの活動として位置 付けています。今年度は、すばる書店の協賛を得て 3年ゼミ生10名と実施いたしました。

今年度の大まかな活動スケジュールは表1の通りです。ゼミ選択の際にも伝えてはありますが、改めて夏休みに入る直前のゼミで、「論文の書き方」の実践練習として、図書館総合展のポスターセッションに出展することを説明します。特に、出展の目的が「研究の一連の流れについて実践を通して理解すること」にあることを強調するようにしています。

表 1:活動スケジュール

時期	内容
7/18@	ポスターセッション出展の目的の理解
夏休み	テーマの提案→投票→精緻化
	先行研究の調査
9/20₺	役割分担の決定とスケジュール確認
9/21-9/25	インタビューの質問項目決定
9/26	聖徳大学図書館員インタビュー実施
9/27₺	アンケート質問項目の決定、依頼状の作成
10/1-6	アンケート配布回収、随時 Excel 入力
10/4₺	アンケート進捗状況の報告
	公立図書館員へのインタビュー実施
10/7-10	アンケート集計(単純、クロス)
10/11₺	アンケート集計結果報告
	インタビュー結果の報告
10/18₺	全体の考察を考える
10/19-24	ポスター制作
10/25₺	ポスター暫定版の報告と微修正
10/27	ポスター印刷発注
10/28	ポスター受け取り
10/30-11/1	第 20 回図書館総合展
11/12®	反省会

※®は授業として設定しているゼミの日という意味であり、 それ以外は、授業時間外の活動となる。網掛け箇所は教員の みが担当する箇所

Step1: 学生は課題の発見、教員は根回し

夏休み中の宿題は、各自1つ以上、取り組みたい テーマを考えることです。ゼミの課題という位置づ け上、コースの活動紹介やブックリストの作成等で はなく、必ず研究然としたものであることというの を唯一の条件としています。ゼミ生とは LINE のグ ループを作成しているため、思いついたテーマと内 容を LINE で報告してもらい、出揃ったところで投 票を行い、一番投票数の多かったテーマに取り組み ます。

「図書館での飲食撃退に向けた現状把握」「図書館に寄せられる疑問要望Q&A」「海外絵本の月齢別提供方法の検討」「図書館お泊り会の企画実施と有用性の検討」「ブックスタートで選ばれる絵本の傾向分析」などが挙がり、「図書館での飲食撃退に向けた現状把

握」が選ばれました。

テーマ提案者は、飲食物によって図書館資料がどの程度損害をうけているのかを冊数や損害額で把握し、それを軽減する提案を行いたいとのことでした。しかし、図書館資料による汚破損の統計をとっている図書館であっても、飲食に起因するものだけを別枠でカウントしているとは考えにくいこと、そもそも飲食に起因する汚破損か否か判断するのが難しい場合もあることなどを指摘し、少し視野を広げて「人的要因による図書館資料の汚破損の現状と軽減する方策の提案」に決定しました。その後は残りの夏休み期間は、先行研究を読んでおくように指示します。

今回のテーマでは図書館の協力が不可欠であると 判断し、かねてからインターンシップの受け入れ等 でお世話になっているすばる書店の図書館事業部代 表者に協賛を依頼し、許諾を得ておきました。

今年は例年より図書館総合展の開催時期が早かったため、例年2ヶ月近くとれる準備期間が、1か月半弱という状況でした。秋学期に入ってから研究方法を議論していては出展に間に合わないため、研究方法はこちらで決めてしまうことにしました。

ゼミ生の人数が多いことを利用して、図書館員、 利用者双方に調査を実施する計画を立て、すばる書 店が指定管理者となっている図書館の職員と、聖徳 大学附属図書館(聖徳大学川並弘昭記念図書館)の 職員、利用者の調査として受講生が多い授業の担当 教員に調査の内諾を得ておきました。

Step2:役割分担の決定

秋学期初回のゼミは、担当決めです。能動的に参加してもらうため、立候補で振分けし、各班でリーダー等も定めました。

- ・ 1班(4名):図書館員に対してインタビュー調査を行い、人的要因による図書館資料の汚破損の現状や対応を把握し、傾向を分析する。
- ・ 2班(4名):利用者に対してアンケート調査を 行い、利用者がどのように図書館資料を扱って いるのかを把握するとともに、人的要因による 汚破損がなぜ起こるのかを分析する。
- ・ 全員 (10 名): 考察部分の検討と、人的要因に よる汚破損を軽減する方策の検討
 - 3班(2名):ポスター制作

Step3:学生が考え、教員はお膳立て

2回目以降は、アンケートやインタビューの質問項目の決定、依頼状の作成、依頼、実査と盛りだくさん。インタビューの書き起こし、アンケート調査の単純集計、仮説検証のためのクロス集計といった素材作りは全面的にサポートしますが、それ以外は、考察を含め、各班のリーダーが取りまとめ、進めていきます。全体の考察まで決まると、3班がポスターのデザイン、盛り込む内容の取捨選択を行い、ポスターとして仕上げていきます(図3参照)。

Step4:そして迎えた当日!

2人1組になり、30分ずつ交代でポスター前に待機し、来場者にプレゼンテーションを行います。

図書館情報大学・筑波大学の後輩、同期、先輩、 恩師に加え、聖徳大学や非常勤先の在学生や卒業生、 司書講習の受講生などが足を止めて、プレゼンに耳 を傾け、適切なアドバイスや講評をくださいました。 なかには知り合いをポスター前まで連れてきてくれ る方まで!森茜先生もお忙しい中おいでくださり、 学生にあたたかいお言葉をかけてくださいました。

Step5: 反省会

図書館総合展終了後のゼミでは反省会を行います。

SOUTH STATE OF THE PARTY OF THE

図1: 筑波大学の白井哲哉教授に説明する学生

「卒論の大体の流れがわかったのでやってよかった」 「当日はポスターの内容以外の話題を振られて知識 不足を感じた」「先輩(地方の図書館に就職した聖徳 大卒業生)の活躍を知れてうれしかった」「〇〇大学 の先生のツッコミが厳しかった」「勤務先の図書館の 事例を教えてくれる優しい人がいた」など思い思い の感想を述べあいます。

当初設定した 3 つ目の目標が達成できているか、はっきりとは評価できませんが、学生がキハラの図書館グッズについてばかりでなく、図書館業界のヒトに着目した発言を多くするようになってきているという実感はもっています。

おわりに

出展者として参加するようになってから、特に感じるのは、図書館関係のコミュニティ、そしてそのコアのひとつとなっている図書館情報大学・筑波大学のコミュニティの絆の強さと、後進を育てるという強い信念です。私は今もその中で育ててもらっているということを年に一度実感します。

この素晴らしい人的ネットワークと信念を私自身 大切な財産としながら、勤務先の学生にも還元して いけたらと思っております。

(橘会理事 かたやま ふみ 筑大院 平 26[2014])

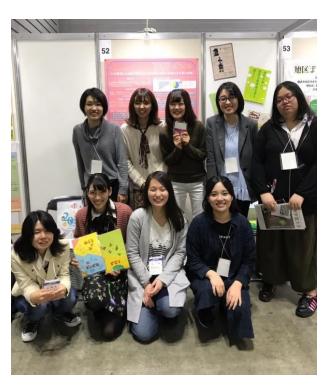


図2:ポスターの前での記念撮影

型徳大学 文学部 図書館情報コース 片山ゼミ(○はリーダー) アンケート実施:○長戸日向、小山琴米、斉藤流花、山下日菓子 インタピュー実施:○安原理史、 伊藤輝恵、長谷川桃子、林沙緒梨 ポスター・『おはそレザュギュっと大 第合』制作:○鈴木理:沙、 総括・分析・指導:片山ふみ 協員:株式会社すばる

人的要因による図書館資料の汚破損の現状と軽減する方策の提案

◎目約◎

人的要因による図書館資料の汚破損の現状と、利用者による図書館資料の扱い方の現状を明らかにし、人的要因による図書館資料の汚破損を軽減する方策を検討する。

◎研究方法◎

調査① 図書館員へのインタビュー調査

調査② 大学生へのアンケート調査

※調査期間はいずれも9月下旬から10月上旬

◎調査1 図書館員へのインタビュー◎

調査目的: 図書館がどのような資料の汚破損に心まされているのかまた、どのような対策を行っているのかを明らかにする 調査対象: 公立図書館1館、大学図書館1館

結果1:人的被害の種類

公立では水ぬれ、 大学では書き込みが多い!

書き込み、切り抜き、折込み、挟み込み、破れ、日焼け、指なめじみ、水ぬれ、背割れ、セロハンテープによる補修、背の上の破れ、血痕、食べこぼし、指の油じみ、子ども・ペットによる「かじり」

<u>- - 「インコシュレッダー」が有名!</u> 新果<u>2</u>:彳亍っている対策

返却時のチェック、汚破損資料の展示、雨の日に袋を渡す、 見回り、飲食禁止の標識

結果3:人的被害への対策に対する図書館員の共通意識

- ネガティブな標識を出したくない(例:「〇〇禁止」)
- 利用者が図書館資料をみんなのものだと認識していないことが根本原因!

◎調査2 大学生へのアンケート調査◎

調査目的:利用者の図書館資料についての扱い方の傾向、 また、図書館資料への意識を明らかにすること

調査対象:聖徳大学生

実施方法:多様な学科の学生が集まる授業で配布回収

有効回答数:167代 質問項目:別添

<u>終吉果4</u>:図 書館資料の汚破損につながる可能性のある行為

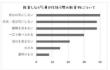
図書館資料の扱いについて図書の汚破損に間接的、直接的につながる可能性のある行為を四段階評価で質問した結果



図 書館 資料の扱いとして不適切な行為であると知らなかった項目 も申告してもらった質問の結果

- 資料の汚破損につながりうる行為の上位は、資料収 集や文献調査の際に行いやすい項目
- 学生の7割が行う背の上への指かけ行為はやってはいけないという認識不足からきている!

<u>結果5</u>:飲食に対する意識





図書館資料と共に飲食をすることには無頓着な反面、図書館内で"の飲食に対しては問題意識をもっている

Why?

図書館という空間においては、これまでの教育や日本人としての 特性(集団に合わせる)が働き、飲食はしないほうがよい、資料 は公共財であると感じている。一方で、図書館外では緊張感や 秩序から解放され、公共財であるということの意識が薄れてしま うのではないか

<u>結果6</u>:図書館資料と自分で購入した本の扱い方

「自分の本のほうが丁寧に扱う」「同等に扱う」「図書館の本のほうが丁寧に扱う」の3fRで尋ねた結果

図書館情報学専攻の学生は「図書館の本のほうが丁寧に 扱う」割合が高かった!

○人的要因による図書館資料への被害を 軽減する方法の検討○

結果 のまとめ

- ① 人的要因による図書館資料の汚破損被害は一定程度存在しているが、図書館員は、ネザディブさがない形での対策を希望している(結果1~3)
- ② 利用者は、認識不足によって図書館資料を不通りに扱って しまう可能性生がある(結果4)
- ③ 図書館資料が公共見れてあるとの認識が薄れたときに不適 切に扱ってしまう可能性がある(結果5)
- ④ 図書館情報学を学ぶと図書館資料を丁寧に扱う可能性がある(結果6)

司書資格課程で学ぶような(Φ)基本的な資料の扱い方を 周知し(②)、公共物であるとの認識を高めるような(③) 利用者教育が有用!

すでに行われている汚破損資料の現物展示などがこれを満たすが、 ネガティブさがない(①)とはいいきれない。

◎『おはそんギュギュっと大集合』の提案◎

大学図書館でネワ年度の図書館案内の際に取り入れられる試みとして、ネがティアさも控えがわいらしくデザインした、『おはそんギュギュっと大集合』(あらゆる汚破損のパターンを表現した手作り本)の配布も捜案する(展示資料)。これにより不適切な扱いがどのような汚破損につながりうるが学んでもらう。

また、公共財であるとの認識を高める試みとして、『おはそんギュギュっと大 集合』にニューアーク式 貸出カード主採用する。 貸出カードはプライバシーの問題で 欠点があるため現在の図書館 界ではる 定されているが、自分以外に借りる人の存在を意識することができるという点では、通した素材である。SNS世代の大学生にとってだれかとつながることは身近な事材であり、そうした意識を図書館でも醸成できたら成功だと考える。

この取ALLに対するお問い合わせ先 Email:katayama@seitoku.ac.jp

図3:完成したポスター

図書館情報学橘会

7305-8550 つくば市春日 1-2 E-mail info@tachibana-kai.com

公式ホームページ https://tachibana-kai.com/web/

Facebook.com/lib.info.tachibanakai/

発行: 2019年3月10日